

金融システム研究フォーラム 概要

第 44 回 2011.5.30 (月)

今回の会合では、今次の金融危機との関連で大きな話題となっている Hyman P. Minsky、Nouriel Roubini 両教授の主張を取り上げた。話題になっているといっても、「・・・教授が喝破したように・・・」という前置きとともに断定的な結論のみが言及・強調されるケースがほとんどである。「いかなる論拠と証拠に基づく主張か?」「主張の実質的内容はいかなるものか?」「理解可能で説得的か?」という健全な常識に基づく関心を抱いても、目的に合致する素材を見つけ、主張の内容に即した検討の機会を見出すことは容易でない。

今回は横浜国立大学の倉澤資成氏に Minsky を、青山学院大学の福井義高氏に Roubini を割り振り、話題になっている「予言」的部分に焦点を合わせて、彼らの主張を正確に報告し、話題を提供することをお願いした。容易には理解可能でないこと、ご両人がいずれも割り振られた主張の内容に批判的であることを承知の上でのお願いである。当日は、主張の内容を正確に紹介することとできるかぎり主張を代弁・擁護することを求めた。予想通り、会合の参加者は、紹介された内容を、理解不能な混乱した主張であって、こういう主張が話題となり広範な支持を集める理由がわからない・・・と考えたようである。報告者は、準備段階のみならず、会合の場でも大きな苦悩とスリルを楽しんだように見える。

「想定外」か否かはともかく、何か重大な出来事が発生すると、過去の言説が浮上し、「・・・が喝破した如く」で始まる話題が人気を集める。話題の提供者は、以前からその言説に深く共鳴していた人物にかぎらない。そういうタイプのものの言い方を好む人物や、そういうものの言いに対する需要の高まりにいち早く対応するタイプの人物も少なくないようである。そういうものを好む多くの人たちの潜在需要が供給を創り出す・・・という側面も濃厚である。視野の広さ・思考の柔軟性・知的好奇心と謙虚さなどのいずれによるにせよ、「へえ・・・、そうなの・・・。主張の実質的内容はどんなものですか?」と考えて、関心を示す私（三輪）のような人間も少なくないだろう。今回の「金融危機」とともに、両教授のような存在に注目が集まったとしても、奇異でも不思議でもない。「資本主義の危機」では Marx、Keynes、Schumpeter が定番だろうが、今回はこのご両人であった。

三輪や倉澤氏の世代にとっては Minsky の名前はおなじみである。しかし、主張の内容は容易には理解できないだろうと考えている点でもイメージは共通であった。「Minsky を取り上げたいが、主張の内容を紹介していただけませんか?」というお願いを始めてから会合が実現するまでに長い時間を要した。倉澤氏の報告用資料を見ると、理解の取っ掛かりになるようなモデルらしきものが存在することに驚くと同時に、この主張が人気を博している

ことに改めて驚く読者が多いだろう。「ほとんどの支持者は、Minsky の著作にあたって確認することなく、せいぜい誰かの受け売りをしているのだ」と考えて納得するだろう。

故人である Minsky とは異なり、現役のニューヨーク大学教授としてとりわけ今回の金融危機の到来を「予言」した人物として注目され、現時点に至るまで華々しくメディアでも活躍する Roubini に関しては、福井氏の周到な報告用メモをご覧ください。大いなる期待と好奇心を持って Stephen Mihm との共著 *Crisis Economics*(邦訳『大いなる不安定』)を読んで、迷子になったような気分で途方に暮れ、「いつものことか・・・」と途中で放り出した三輪のような読者の多くも、福井氏のメモを見て納得するだろう。もちろん、迷子になったような気分にならなかった読者の反応は予想しがたい。最後に紹介される Burton や Roll の主張をスンナリ受け入れる読者がこの日本に多いとは思われない。

当日の議論は大いに盛り上がり、論点は各方面に展開した。参加者全員が、「やっぱりね・・・」と考え、「やれやれスッキリした」という三輪のような気分になったということはなかろう。しかし、参加者相互間の意見交換も含め、多様な主張に接することができた有意義な会合であった。難儀な役割を引き受けて素晴らしいパフォーマンスを示してくださった倉澤・福井両氏に深謝します。